

《第 524 回(2025 年 5 月 8 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:9 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『ハートビート』 シャロン・クリーチ/作, もき かずこ/訳, 堀川 理万子/絵 偕成社

5月の読書会は、『ハートビート』を読みました。12歳の少女アニーの毎日がリズムカルな散文詩形式で描かれています。お母さんのおなかの中にいる赤ちゃんのこと、老いていくおじいちゃんのこと、そして、幼なじみのマックスのこと。家族の誕生と老いを見つめる物語です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●吉野弘の詩「I was born」を思い出した。生まれる命と老いる命が、りんごに象徴されている。命の不思議さが哲学的で、詩だからこそ伝わるものがあつた。「走るための喜びのために走る」というおじいちゃんの手紙がよかった。全編を通して、ひとつの詩だと思う。

●散文詩はあまり好きじゃないが、この本は読んでいくうちに面白くなった。アニーとおじいちゃんが話をするシーンがよい。脚注という章のあと、脚注にアニーの気持ちが書かれていて面白かった。表紙と裏表紙のりんごの絵、扉の真っ白な絵が印象的。おじいちゃんが途中でりんごをかじってしまうことにびっくりした。

●アニーの素直な考え方が好き。文字が茶色いが、足音や心音をリズムカルな文章にしたときに、このインクの色がよい。最後にある、種が涙の形をしているという文章が好き。老いていく悲しみの涙、生まれる喜びの涙。種は始まりのイメージだったが、始まりでもあり、終わりでもある。よい本が読めた。

●アニーの一人語りを聞いているようだった。脚注で毒を吐くのも面白く、読みやすかった。時の流れがうまく表現されていた。パラパラと動く絵もよかった。そのときのアニーとマックスを表しているよう。陸上をやめたことを後悔していないと言うおじいちゃん。自分できっちり決めたら後悔はしない。

●自分の予想と違って、希望を感じる本だった。タイトルの「ハートビート」、最初は「足音」というタイトルでもいいかと思ったが、アニーと弟、おじいちゃんの心臓の音の違いを聞いて納得した。アニーは絵を描くことが好き。美術の課題で100枚のりんごを描くが、まさかおじいちゃんが食べてしまうとは。

●ハートビートが鼓動のことだとわかって納得した。りんごを見ると、聖書のアダムとイブを思い出す。聖書には自分の想いから離れて、惑わされないようにと書かれている。多様性が謳われ、情報過多な時代だからこそ、自分のことをひとつひとつ丁寧にやらずにはいけないと感じた。

●重いテーマが隠されているが、アニーの考え方が前向きでよかった。なにかあっても、その怒りを自分のエネルギーに変えて、次につなげていく。先が楽しみになるような終わり方がよかった。この家族は上手に調和して過ごしている。「好き」ということはエネルギーになる。好きなことをしていれば、自分を回復できる。

●小説のように詳しく説明されていない分、アニーのまわりの空気や景色を想像しながら楽しく読めた。食べられてしまったりんごから出てきた種は、これからりんごの木となり新しい実をつける。生命の誕生も老いも包み込んだ、希望を感じる終わり方だった。

●散文詩で書かれていて、トントントンと読めた。一人称で書かれているのが効果的。おなかの中の赤ちゃんは最初エイリアンベイビーと呼ばれるが、この赤ちゃんの存在が物語を希望の光で包んでくれる。おじいちゃんの手紙も胸に響いた。最後に残されたりんごの種。ここに命のつながりを感じた。

次回 6月12日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

『雪女 夏の日の夢』 ラフカディオ・ハーン/作, 脇 明子/訳 岩波書店(岩波少年文庫)

※申込み・参加費は不要です。